

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

唄い屋 零

淫書の誘いに妖華咲く

ZERO

The title '唄い屋 零' is rendered in a bold, stylized font. '唄い屋' is in a rounded, bubbly style, while '零' is a large, expressive calligraphic character. Below '唄い屋' is the subtitle '淫書 of 誘いに妖華咲く'. To the right of '零' is the word 'ZERO' in a small, blocky font, and a large, dark, brush-stroke-like flourish extends from the bottom of '零'.

小説 斐芝嘉和

挿絵 高浜太郎

	プロローグ	006
	第一章 魔女の影	011
	第二章 羞恥の教室	034
	第三章 水魔	054
	第四章 悔恨	088
	第五章 闇	104
	第六章 企み	120
	第七章 宴	165
	第八章 淫儀の果てに……	209

## 登場人物紹介

Characters



ささき れい  
**佐々木 零**

「呪い屋」の通り名で知られる凄腕の呪術師。十代半ばの容姿をしているが、年齢不詳。偽悪趣味の皮肉屋。



そのだ かおり  
**園田 香織**

此花女学院二年生。寮では零のルームメイト。雀斑が可愛い三つ編み眼鏡娘。純情で内気な性格。



ありすがわ ありす  
**有栖川 亜梨子**

此花女学院理事長の孫娘。生徒会長を務めており、生徒たちから密かに「姫」と呼ばれて慕われている。



ちようれいよく  
**趙 翠玉**

此花女学院の校医。

(し、しまった……!)

頭が真っ白になる快感はすぐに引き、あられもない声を上げてしまったことに気づいて頬がカアッと熱くなった。よほど大きな声だったのか、先ほどまでの声援はやみ、プールの中で競技していた少女たちも動きを止めて零を見つめている。

「ち、違う、いまのは……」

亜梨子に変なことをされたから——言う前に、横からお嬢様が口を挟む。

「やだ、佐々木さんったらまた、イケナイ気分になってしまったの？」

鈴の音のように澄んだ声は、シーンと静まったプールサイドに響き渡った。

「昨日も教室で立たされて、いやらしい声を上げていたわねえ。ひよつとして、見られると変な気分になってくる変態さんなのかしら？」

「ちが……ああッ!？」

ウニウニウニウニ。

水着の中、生温かな触手に尻穴が穿られる。スライムが身体の端を細くして、括約筋を揉み解し、排泄器官の中へ潜り込もうとしているのだ。よりによってこんな、学院中の生徒が自分に注目しているときに——。

(ああ、マズい……ヤバイ!)

耳の先まで紅くなって羞じらっているのに、窄まった菊蕾を細く尖ったモノがニユル



ン！ と潜り抜ける。自在に形を変える流動体は髪の毛よりも細くなり、直腸粘膜を撫で回しながら奥へ奥へ。結腸の縁に到達すると動きを止め、今度はムクムクと膨れ始めた。

「くあ、あ、あああ……」

排泄孔がこじ開けられていく。弾力に満ちた太さに括約筋が引き伸ばされ、ジンジンと痺れた。肉穴から左右の尻房に向けて染み広がる微弱電流。双の尻房に染み渡る心地よい熱。腰骨が蕩け、下半身から力が抜けてしまふ。

両手を尻に被せ、蠢くスライムを押さえようとすると、

「んはうっ!？」

今度は前の穴に。粘つく液体の塊が、繊細な腔口粘膜をヌルヌルと舐め上げながら侵入してくる。生温かなナメクジの群が雪崩れ込んでくるような、おぞましい感覚。なのに、蜜壺の中を這い回られると胎内に快感が溢れた。必死に歯を喰い縛るのに、喉の奥から甘い吐息が溢れ、こぼれ出そうになる。

「やだ、なんか気持ちよさそうにしてるわよ」

「見られてエッチな気分になるヒトって、本当にいるんだ……」

観客たちの囁き声に羞恥心が掻き立てられる。違うんだ、これは水魔が——叫びたいのに、ヌルヌル蠢く流体に侵入された肉穴から甘い気持ち湧き上がり、腹に力が入らなかつた。言い訳している余裕はない。早くプールから上がっていやらしいスライムを掻き出

さなければ……弛む身体を懸命に動かし、泳ぎ出すと、亜梨子がびったりとついてきた。「あと少しよ、頑張って」

氣遣うフリをしつつ、乳房に触れ、尻を撫でるお嬢様。胸に触れた手指はクニクニと曲がり、水魔のぬめりが乳肌を擦り込まれる。桃尻に乗せられた手は尻割れを探り、肛門を見つけてキュッキュッと責め立ててきた。少女の手に操られているのか、水着の中で生温かな粘液が流動し、ヘソや乳房の谷間が執拗に舐め回される。溢れる悦びに力が抜けて、溺れそうになる。

「く、やめろ、やめ……触るなあっ！」

絡みつく手を払い除け、どうにかプールサイドにたどり着いた。腕をつき、愉悦に弛んで重くなった身体を引き上げる。

(くそう……手足に力が、入らない……)

早く更衣室に行きたいのに、立ち上がれなかった。ふたつの淫穴が蠢くスライムに掻き回され、溢れる悦び。膣壁が一枚一枚捲り返され、快感が産みつけられる。揉み立てられた直腸粘膜がトロトロに蕩けてしまう。

しかし、いつまでもこんな場所にいるわけにはいかない。股布に広がる恥ずかしいぬめりは、スライムに占領された淫穴から溢れ出た生温かな恥蜜。羞恥の粘液が、水着から滴る水に紛れているうちに、早くどうにかしなくては……灼けたタイルに腕をつき、羞恥に

赤らんだ頬を俯けて四つん這いになったとき、

「キャアッ！」

黄色い悲鳴が上がり、零の前にいた少女たちが慌てて身を引いた。いくらなんでも過剰な反応。真っ赤になった彼女たちの視線を追い、自分の胸を見下ろすと……。

「あ……ああっ！」

水着の片方の肩紐が落ち、コンクリートの床についた腕の間に右の乳房がこぼれ出ていた。桜色に火照り、水蜜桃のように濡れて、プルプルと震えている。下を向いた頂点には、紅く色づいた小さな肉実。輝くほどに張り詰めて、いまにもパチンと弾けてしまいそう。慌てて手を被せて隠したのに――。

「いまの見た？ 乳首、あんなに大きくしちやあって……恥ずかしくないのかしら？」

遠慮がちに交わされる囁き声は、やがて聞こえよがしの忍び笑いに変わる。

……クスクス……いやあねえ、変態よ変態……クスクス……どうしてあんな仔がいるのかしら？ 学院の恥だわ……クスクス……笑っちゃ可哀想よ……クスクス……

(違う、違う違う違ううううっ――！)

爆発する羞恥に脳裏が白く灼けた。鼓動が跳ね上がり、全身から羞恥の汗がぶわっと噴き出してくる。いまずぐ逃げ出してしまうのに、あまりの恥ずかしさにクラクラと眩暈がし、身体は石のように強張って身じろぎひとつできなかつた。四つん這いのまま、た



だブルブルと震えるだけ。

「なにアレ、お尻に喰い込んでるわ！」

プールを挟んで反対側のサイドから、叫び声が上がった。

「アソコのお肉がはみ出してる！ キャー！ イヤアッ！」

イヤと言いつつ、真っ赤になった顔を覆う両手の指は、しっかりと開いていた。指の間から見つめる零の股間は――紐のように細くなった股布が深々と喰い込み、桃尻はほとんど丸見え。深く曲げられた太腿の合間には桜色に火照った肉アケビがはみ出し、水滴がぼたり、ぼたりと垂れている。

（み、見るな……見るなあっ！）

好奇の歓声を浴びて、ようやく手が動いた。腹の下から太腿の間に滑り込み、股布に断ち割られた媚肉の畝を隠す。しかし、焦って動いたせいでバランスを崩し、その場に仰向けに転がってしまった。

「ああ……っ！」

揺れた片乳が水着を振り払い、胸の上で元氣よく弾む。水とスライムに濡れていやらしく光る桜色のメロンに、観客の視線が集まった。ブルブル揺れる胸丘の先で、真っ赤に色づいた肉突起が恥ずかしそうに震える。

「見るな、見ないでくれえっ！」

浴びせられる好奇の眼差しから守ろうとして左手を胸に被せた途端、無防備になった股間で、水着の中に染み広がった生温かな物体がぬるり、と蠢く。

「ふああッ!? や、やめ……はうん！」

細い指と化したスライムに、クリトリスの包皮を剥かれた。飛び出してきた神経の塊が濡れた布地に擦れ、弾ける快感。ビクッと身を竦めると、キツキツの肩紐に水着が引き上げられ、再び搓れた股布に硬く痲った肉豆が噛み込まれてしまう。

(くそう、畜生……!)

慌てて剥き出しの淫核に絡みついた水着を解こうとしたが、力加減を誤った。布地越しに極点をキュッキュッと揉み捏ねてしまい、

「はううっ!? あ、あぁうっ！」

さらに強いスパークが炸裂する。雷に打たれたように背が反り返り、股間から水飛沫を上げて跳ね上がる零。

パツン!

重々しく揺れる乳房に耐えきれず、とうとう肩紐が切れた。スライムに舐め回されて熟しきった柔肉の果実が、ぷるるん! と豊かに震えながら飛び出してくる。自由を得た双球は反った胸から転げ落ち、恍惚と羞恥に赤らんだ零の頬をムニユッと挟み込んだ。

「やだ、見られているのに指遊びしてる！」

「オッパイが張ってるわね、昂奮してるんだ……乳首なんか、サクランボみたいよ」

浴びせられる嘲笑。零とて、やめられるものならいますぐやめたい。だが――。

(な、なんで……どうして、ああ、そんなああ……!!)

肉割れに添えた指が、勝手に動く。水に擬態したスライムが柔肌に貼りつき、身体を操っているのだ。指を包み込んだ軟体に逆らい、無理矢理指を伸ばそうとするのに、

「くうう……あふっ！ あああ、ダメえ！」

相反する力が拮抗し、指先が細かく震え出した。股布を通して伝わる振動は裏地を濡らした粘液に分散され、硬く痼ったクリトリス全体を激しく責め立てる。

「ち、ちが……この指は、アタシじゃな……くふ、ふああああ……」

水着に絡みつかれた小突起に、次々と弾ける電撃。津波が背を駆け上がり、瞼の裏に閃光が走った。スクール水着に包まれたグラマーな体躯が海老のようにビチビチ跳ねる。指先に、水やスライムとは明らかに違うぬめりを感じた。淫蜜が溢れ出し、紺色の布目から滲み出してくる。

(あうう……そ、そんな、胸まで……)

空いているほうの手が曲がり、水着からこぼれ出た乳房をギョッと掴んだ。細指が尺取り虫のように蠢くと、乳奥にあった熱い疼きが攪拌されて肉釣鐘全体がウズウズしてくる。先端の肉突起がますます硬く痼り勃った。艶やかに張り詰めた紅い皮膚は剥き出しのクリ

トリスほどに敏感さを増し、微風に撫でられただけでもピンピンと響く。

「くうう……み、見るな……見るなあ……んぷッ!!」

唯一自由になる口が、柔らかなモノに塞がれた。スライムに操られた手が乳房を歪め、その先端を押しつけてきたのだ。しつとりと濡れた唇の感触が、敏感さを増した胸先の柔肌に気持ちいい。淫らかな気分が膨れ上がり、意識が隅へ追いやられる。

(や、ばい……おかしく、なる……)

押し返そうとして舌を伸ばしたつもりだったのに、

「んふえあッ!!」

勃起乳首を舐めてしまい、悦びが突き刺さった。指に抓まれたクリトリスと口に含んだ肉豆の間を、強烈な電流が行き来する。

「まあ、いやらしい！ 自分のオッパイをしゃぶってるわ！」

胸を扶ける嘲笑。溢れる羞恥に頭の中が真っ白になった。

(ち、がう……アタシはそんな、変態じゃ……ああ!? ああ、そんな、どうして!?)

昂る鼓動。全身がカアッと煮え立って、なぜだか気持ちよくなってしまう。脳の配線がショートしたのか、恥ずかしく思えば思うほど子宮がグツグツ沸騰する。肌が赤らみ、汗の霧を噴き始めた。込み上げてくる肉悦に理性が押し流されて――。

「やらう、うぶ、んちゅちゅう……!!」

唇が勝手に動き出し、自らの乳肉をチュプチュプ吸い立てる。皓<sup>こう</sup>歯<sup>し</sup>は乳首を甘噛みし、尖った舌先が乳頭を穿った。

(ダメだ、こんな……みんなが見てる、見てる……のにい……!)

止められない、止まらない。

紺色の布地に喰い込まれた恥丘を、細指が激しくしごき上げる。ヌチャヌチャと音を立てるクロツチから、糸引く蜜が滴り落ちた。乳房を掴んだ指先は、濡れた柔肉をキュッキュツと揉み立て、桜色に火照った美肌に深々と喰い込んで、観客の少女たちにその豊満さを見せつける。

「あらあら、エッチなお汁をこぼしちゃって……」

亜梨子の声。だが、姿は見えない。溢れる快感に猫目の焦点が合わず、眩い夏の陽射しを浴びて視界が白く掠れている。背中に感じる灼けたタイルが気持ちいい。どこで、どんな姿でなにをしているのかも分からなくなってきた。

(イク、イッチャウ……もう少しで……)

「みなさんの目の毒ですわ。さつさとおいきなさい」

「ふえあ？ あ、あああつ!？」

口に啜えていないほうの乳首がキュツと抓まれた。弾ける電撃。それが、最後の一線。

乳房や股間に蓄積していた熱いモノが、一気にカアッと燃え上がった。

「はヒイッ!! いや、いや、いやいやイくイくうううううううっ!」

真つ白な快感が脳天を突き抜ける。

ビクビクッ!!

跳ね上がるほど痙攣し、股間が高く突き上げられて、大きく開いた太腿の筋肉がピーンと緊張する。水に濡れた頬や肩、こぼれた乳房の柔肌を染め上げる艶めかしい朱。猫目が恍惚の色を浮かべて弛み、爪先がなにかを掴むようにキュウッと曲がる。

ぶしゅっ! ぶじゅじゅじゅじゅ……

見せびらかすように持ち上げられた恥部から、白く泡立った粘液が勢いよく噴き出してきた。ペニスをしやぶる要領で膣洞と直腸が捻れ縮み、中に潜り込んでいた水魔を搾り出したのだ。だが、事情を知らない少女たちの目には、零がイヤラシイお漏らしをしたようにしか見えない。

「ウソ……イッチャったわよあの仔」

「気持ち悪うい! 佐々木センパイって、変態だったんだあ……」

遠くから聞こえる生徒たちの声。だが、絶頂の余韻にたゆたう零は、猫目を細めたままあうあうと虚しく喘ぐだけだった――。



シユルルルル——幽かな音が聞こえて、零の耳を紐のようなモノが掠めた。焦点の揺らぐ目を必死に巡らすと、うしろ上方から斜めに、何本もの太い紐が伸びていた。

（うあ……オチンチン、だあ……）

先端に亀頭のような瘤を見つけ、零の猫目がいやらしく弛んだ。粘液に濡れているのか、月光を浴びてヌラヌラと輝いている。先端には亀頭のような膨らみがあり、白い滴を垂らしていた。淫気のスミレ香を押し退けて、青臭い匂いが周囲に満ちる。長く伸びた棹部には青筋が浮き、ところどころにコブコブとした筋肉を盛り上がらせて、見るからに硬そう。太さでは金剛の逸物には及ばないが、きつと同じくらいに気持ちいいだろう。腹の中に感触を想像すると、双子の剛棒を咥え込んだ肉穴がキュウツと窄まった。泡立った淫水が溢れ出し、太腿を包み込んだレオタードにヌラヌラと垂れ落ちる。

蛇のようにならうつソレは、睦み合う少女たちの身体に絡みつき、乳房やうなじを撫で回しながら、無防備な肛門や肉割れに潜り込んだ。

「ヤン!? なにこれ……気持ちいい!」

不気味な触手に犯されているというのに、だれも悲鳴を上げなかった。そればかりか自ら口を開け、穴の空いた先端を呑み込んでうつとりと目を細める者までいる。

大聖歡喜天だ。長い鼻を細分化して、生け贄たちの生気を吸い取ろうとしているのだ。

※



それは分かるのに、危機感は湧かない。少女に絡みついた触手に手を伸ばし、くびれたウエストをくねらせ乳房を揺らして、

「あ、アタシにもお……ちよおらい……」

はしたない声を上げる零。絶頂の余韻に脳が蕩け、麻痺している——と。

金剛の気配が、不意に薄れた。肉穴を占拠していた剛棒までもが消えていく。

「やあん……まらいくのお……やめちやイヤア……」

舌足らずな声で求めつつ、首をねじってうしろを見ると、触手に絡みつかれた巨漢の身体がドロドロと溶けていた。生氣とはすなわち呪力。死んだ細胞を繋ぎ止めていた呪力を吸い取られて、腐肉に戻っていく。

巨漢の代わりに、黒レオタードに包まれた伸びやかな脛に太い触手が絡みついてきた。グルグルと巻きつき、粘液に濡れた表面を波打たせながら淫水まみれの脚線美を這い登り、肉穴に迫ってくる。

「あうああ……やあん、あ、あしがああ、とろけちやううう」

うねる肉紐に愛撫された脛や太腿の筋肉が、気持ちいい。ギユウ、ギユウ、と締めつけられると骨の髄まで揉み抜かれ、力を吸い取られてしまう。

蕩けているのは脚だけではなかった。腕に巻きついた肉紐はジャケットの袖に潜り込み、破れ目からレオタードの中に侵入して、腋窩をくすぐりながら胸に回り乳根にクルリと巻

きついた。悶える零を戒めるように絡みつき、柔肉に喰い込んできつくきつく締め上げる。  
「あ、あちゅいいい！ 肌が、肌が、燃えるううっ！」

蠢く触手に觸られた柔肌が淫らに火照る。性愛の神・大聖歡喜天は生け贄を快感の頂まで追い上げて、イク瞬間の一番美味い生気を貪るのだ。肉紐の表面に浮く粘液には、催淫性の呪力が含まれているらしい。ぬちゃぬちゃ塗り込まれた肌がカァッと熱くなり、夜風に撫でられただけでピンピン感じる性感帯に作り替えられてしまう。

乳肌を這い回るねっとりした触手。広い麓から頂点に向けて螺旋状に絡みついた触手が、蠕動しながら柔肉を愛撫すると、勃起乳首の先端からピュッピュッと白い液体が噴いた。鎌首をもたげた触手が亀頭を擦りつけ、熱いミルクを乳肌に塗りに塗りに広げる。

「んはあ……ヌルヌルう、オッパイにゆるにゆるになりゆううう……！」  
ゴムのような弾力に揉み解された肉釣鐘が、カァッと煮え立ってきた。肌の裏側に欲望が湧き上がり、狂おしいまでの焦れつたさが募る。

(あ、あつい……胸が、バクハツ、しそう……)

煮え滾ったミルクをビュクビュク噴いているのに、肉釣鐘の芯に溜まった溶岩は少しも減らなかつた。むしろ触手に搾られ、肉塊にしごかれて、ますます熱くなる。

「オッパイ、オッパイ……もつろもつろもんれええ、めひやくひやに……うひゃあ!？」  
ちゆうううう——と乳肌が吸われた。触手の先に空いた小孔が、柔肌に滲んだ汗を吸い



取っているのだ。一ヶ所だけではない。肩の上から腋の下から、何本ものくねる肉紐がまとわりついてくる。脚に絡みついていて一本が、太腿を割って肉割れや会陰部を擦りつつ、尻房の谷間を通って背中に這い登ってきた。砂色のジャケットの下で蛇のようにS字を描き、汗ばんだ背を撫で回す。

「くうう……は、ううう……！」

全身に絡みついた無数の触手が蠢くたび、筋肉が揉み解され、骨まで蕩けてしまえそう。乳房や尻はもちろん、膝小僧や腕、肩胛骨の間までが性感帯になったようにピンピンと感じる。頭の中には桃色の靄が充ち満ちて、意識がぼやけてきた。気持ちよくてたまらないくびれたウエストがくねり、尻がカクカクと振れてしまう。膣穴と肛門が喘ぐようにヒクついて、スマイレの香りを含んだ淫水を噴きこぼす。

「んはあ、んはあ……ンぷっ!？」

背中からうなじを通して巻きついてきた肉紐が、口の中へ太い筒先をねじ込んできた。プニプニした鼻先が菌茎を愛撫し、さらに奥へ、奥へ——舌の上に乗る、太くて硬くて熱いモノ。苦しよっぱい催淫液が味蕾に染み込んでくると、息苦しさに歪んだ眉根がふわつと開いた。頬や口蓋の粘膜が気持ちいい。溢れる唾液を飲み込めば、喉の奥まで愛撫を求めて疼き出す。

（もつと、もつとちようだい……もつとおくまで、おかしてえ！）

自ら大きく口を開いた呪い屋は、肉紐に押し潰された舌を懸命に回し、粘液に濡れた触手を舐め回した。これを気持ちよくすれば、自分ももっと気持ちよくなれる——その一心で唇を窄め、じゅるるる、と吸い立てた。尖らせた舌先で棹部の弾力を愛で、平らに広げて亀頭状の瘤を撫で上げる。縦に引き伸ばされた唇から、泡立った涎が溢れてきた。顎を伝って喉を濡らし、触手に揉み搾られて歪んだ乳房の上にポタポタと滴り落ちる。

淫らな反応を示す猫目の少女に、性愛を司る象神が興味を示したようだ。

「もんあ、んんううう……!?!」

四肢に絡みついた触手が縮み、身体がグイッと持ち上げられた。視野が広がり、魔法陣の全体が見渡せるようになる。

(あ……みんな、どうしたの……?)

先ほどまであれほど激しく乱れていた生徒や教師たちが、恍惚の表情を浮かべて累々と倒れていた。呪力を持たない彼らはもう、生気を吸い尽くされてしまったらしい。生きてはいるが意思はない、邪教を広げるための操り人形である。

しかしそれを見ても、呪い屋はもう危機感を感じなかった。

(なにしているの、みんな……こんなにイイのに、どうしてエッチしないの……)

弛緩した微笑みを浮かべ、ぼんやりと思うだけ。

その間に、大聖歡喜天は触手をしならせ、零の脚をグイッと割り開く。なにもない宙空

に、なにかに跨ったようなポーズ。下から見上げれば、淫蜜を滴らせて熟れた肉アケビや紅い粘膜を捲り返して弛みきった菊蕾が無防備に晒されていた。乳液と淫水に濡れてぬらぬら光るレオタードの黒と、その破れ目からはみ出した柔肉の白が降り注ぐ月光を浴びて輝く。両腕が背後に捻られ、胸が反らされた。触手に巻きつかれて柔らかく歪んだ双球が、まるで見せびらかすように突き出される。

「ああん!? お、おひり、おひりがああ……!!」

捲れ返った肛門粘膜が熱くて硬いモノにツンツンとせせられた。カァッと燃え上がる尻穴。触手の先に亀頭が生え、その先に滲んだ催淫粘液を繊細な肉花卉に拭いつけたのだ。

「やううう……あちゅい、あちゅい……!!」

こらえがたい疼きが、肉穴の口から奥に向けてじわじわと這い上がってきた。弛みきっていた括約筋がキュウツと窄まり、直腸が狂おしく捻れる。それだけでは消えない。なにか太いモノを突き込んで滅茶苦茶に掻き回さないと、おかしくなってしまう。

「い、いれふえ……おひりに、いれふえええ……!!」

ペニス状の触手を啜えたまま、零は激しく身体を揺すり、腰をくねらせて求めた。獲物の淫らな姿に満足したのか、象神の鼻がぶるん！と震える。

「ンくはあッ!？」

直腸から背を貫き、脳天を突き抜けていく快美感。滾る亀頭が括約筋をこじ開けて、ズ

ブズブと潜り込んでくる。

(な、なに、コレ……ああ、おなが、ぐちゅぐちゅされてるうう！)

排泄器官の内側が、小刻みに揉み立てられた。肉クサビのエラではない。肉棹からイソギンチャクのような分枝が何十本、何百本と生えて、細かく震えて粘膜を廻り回す。

それでいて、先端の肉塊はあくまで硬い。シャクトリムシのように伸縮し、深く抉れたカリ首で直腸粘膜をムニユムニユと揉み立てながら、奥へ奥へと突き進んでいく。

「にやううう……ン！」

金剛のイボつき肉棹よりもずっと細やかな愛撫に、猫目が弛み、頬に恍惚の笑みが浮かぶ。尻穴がキュウウウ、と窄まり、いやらしい蠕動を再開した。腸液にぬめる粘膜壁がうにゆりうにゆりと蠕動し、太い弾力を締め上げる。薄い肉隔壁で隔てられた腔穴も連動し、喘ぐ淫唇の奥からねっとりとした牝汁が溢れ出してきた。

蠢く肉穴が気持ちよかったのか、象神が低く唸る。途端、

「んあああッ！」

巨乳を縦揺れさせ、乳首の先からピュピュッと乳液を噴き出して悶える零。尻穴に深々と潜り込んだ肉肢が、電動玩具のように細かく荒々しく震え出したのだ。

(す、すごい！ おしりが、おかしくなるううっ!!)

激震に揉み解された括約筋が、熱い痺れを発して蕩けていく。小刻みに突き揺すられた

結腸口には激烈な快感が次々と弾けた。媚肉を伝った振動は、煮え滾る溶岩を溜めた子宮にまで響いてきた。腹の奥底に膨れ上がる淫らな欲望。もうひとつの肉穴が、確かな太さを求めて狂おしく捻れる。

「んふえあ……みやえにも、みやえにも、挿入ふえええ……！」

触手に塞がれた口を懸命に動かし、零は涙をこぼして哀願した。膣穴に溢れた疼きは強烈で、いまずぐ滅茶苦茶に掻き回さないと焼け爛れてしまいそう。肉畝を押し分け、鶏冠のように波打つ淫唇がプリッと飛び出した。喘ぐようにヒクつく花芯から、スミレの香を含んだ牝汁が、水飴のような粘りを見せつつグポ、グポ、と噴き出してくる。

だが、肉土手に寄り添ってきた触手は細かく割れて、淫水に濡れた肉ビラをくすぐり、滴る蜜をぶちゅぶちゅと吸い立てるだけ。一瞬間快感はあまりにも弱く、膣穴にわだかまった焦れつたさはますます強くなってしまふ。

（挿入て、挿入てよお……おねがい、なんでもするからあ……！）

駄々っ子のように身体を揺する猫目の少女。尻穴をキウンキウンと締め、頬張った肉紐を滅茶苦茶にしゃぶり立てる。背に回された手は傍を通った触手を掴み、亀頭に似た瘤に指を被せた。滾る肉塊を撫で回し、先端の小孔に小指の先をねじ込んで穿る。

拘束された肢体を捻り、必死に奉仕しているのに——象の姿をした淫神はなおも呪い屋を焦らし続けた。肉瘤がうなじを撫で回し、耳裏に催淫粘液を塗りつける。ウネウネと蠢



く肉紐が胸の谷間に潜り込み、肉悦を孕んで膨れ上がった柔肉を揉み上げた。すでに触手を啜えた唇にいくつもの亀頭が集まって、先から垂れる青臭い白濁液を塗りつける。

鼻腔をくすぐる精臭に、頭がクラクラした。ぬめる液体を塗りつけられた柔肌は快樂神經を掻き立てられて、夜風にソツと撫でられるだけで煮え立つてしまう。

「んああ……やあ、挿入ふえ、挿入ふえよおお……」

淫穴にわだかまった疼きが、こらえきれないほど強くなってきた。まるで無数のイトミミズが絡み合い、激しく蠢いているような感覚。指では間に合わない。もっと太くて硬いモノで掻き混ぜてもらわなければ、気が狂ってしまう——と。

低い笑い声が聞こえたような気がした。淫らな神気が高まり、大きく割り開かれた太腿の間に鎌首が持ち上がる。

(そ、そう、ソレ……ソレがほしいの……)

ヌラヌラ光る太い肉紐に、零の胸が高鳴る。ココに挿入てちょうだい——触手に開かれた脚をさらに大きく開いて、レオタードの破れ目に覗く股間を突き出した。淫水まみれの肉畝が割れ、粘膜炎弁がいやらしく綻んだ。クリトリスは紅く色づき、自ら包皮を振り払って粘液に濡れ光る肉豆本体を現す。淫らに喘ぐ淫唇からとめどなく流れ出るのは、煮詰められたように濃厚な牝蜜。長い糸を引きながら垂れ落ちて、グラウンドに描かれた魔法陣を濡らした。

ぐじゅ。じゅぶぶぶぶ……！！

「んは、はああっ！」

待ちに待っていた弾力が、淫肉を押し開き、溢れ出す粘液に逆らって体内へ潜り込んできた。しごかれた肉穴の入り口にカアッと燃え上がる、甘美な炎。男根に似た触手に細かな膣襞が押し潰されると、あれほど狂おしかった疼きがウソのように癒えていく。

「はあううう、んふいいい、ふいいいよおお！」

期待以上の快感に、猫目の少女は悦びの声を上げながら胸を反らし、夜空に舞い上がるように伸び上がった。頬が弛み、肉紐を啜えて歪んだ唇からはダラダラと涎が溢れてくる。割り開かれた太腿の筋肉が、ピン！ と張り詰めた。犯された肉穴が緊縮し、粘膜器官が触手を搾り上げる。

(ああ……アタシのなかに、ふといるのが、二本も……)

淫穴を埋め尽くしたたくましい剛直にうっとり目を細めていると、

ブン！

それがいきなり、競い合うように震え始めた。

「んひいい……ッ！」

蛇のように自在にくねる触手に、ふたつの淫穴が滅茶苦茶に掻き回される。蜜を含んで膨れ上がった膣襞が、たくましい弾力に撫で回され、揉み潰され、捏ね上げられた。

「あううう、おひり!? おひりもなののおおっ!」

尻穴に潜り込んだ剛直は硬い鼻先でS字結腸をこじ開け、鈴口に滲んだ催淫粘液を塗りつけて、排泄器官を性感帯に作り替えていく。

「あちゆい……おなかぐちやぐちや、ろけちやう、ろけちやううう……!」

小刻みに震わされた膣奥のさらに奥で、淫欲の溶岩を溜めた子宮が沸騰し始めた。双穴を隔てる粘膜隔壁は二本の触手に挟まれ揉みくちやにされ、熱い感覚が次々と弾ける。

(ああくる、アレが、あのキモチイイのが……!)

ゾクゾクゾクッ!

ふたつの肉壺から溢れた激震が、背骨を駆け上る。熱湯の津波。脳髓が揺さぶられ、瞼の裏に稲光が炸裂して――。

「んあ、いく、いくいくいくううっ!!」

遥かな高みへ一気に飛翔。口から肉紐を吐き出した呪い屋は、あられもない声を上げて身を振った。全身がカアッと燃え、毛穴という毛穴が開いて汗の霧を噴き出す。

びゅるる、びゅびゅうっ!

触手に搾られた胸の先から勢いよく迸る白い液体。掻き混ぜられている淫穴からは白く泡立った牝汁がぶしゅぶしゅと、とめどなく溢れ出してくる。

(ああ……き、もち、いい……)

猫目を潤ませ、だらしなく開いた唇から甘い吐息と淫らな涎をこぼしている——。

「んぷっ!」

勝手に吐き出した猫目の少女を叱るように、口腔に再び太い肉紐が突き込まれた。溢れる唾液の中、先端の肉クサビがムクムクと膨らみ、舌を押し潰す。触手がうねり、喉奥にぐぼっとはまった。咽喉蓋を擦り上げつつ、さらに胸の奥へと這い進んでいく。

(うう……な、なんで、どうして……)

息苦しいはずなのに、湧き上がるのは我を忘れるほどの肉悦。触手を感じた食道が蕩けていく。苦悶に歪んでいた柳眉が朱鷺色の恍惚を浮かべ、ふわっと開いた。深々と侵入した疑似亀頭がグボグボと前後に動くと、胸の奥から悦びが溢れてくる。

(す、すご……のどの、こんなおくまで……あはあ、おま○こになっちゃったあ……!)  
異常な体験なのに、それを畏れるだけの理性はもはやない。目元をいやらしく弛め、口端から涎を垂らして淫悦に溺れる呪い屋。

その内部で、三穴を犯した触手が変化する。棹部に相当する肉紐の側面から細かな肉肢が生え出し、熱く蕩けた粘膜壁をくちゆくちゆと颯り始めた。

「んくああッ!? んや、にやふあああッ!!」

膣に肛門に、鮮烈な感覚が弾けた。密生した膣壁が一枚一枚捲り返され、キュッキュツとしごかれる。舌より器用で、指より繊細な愛撫。尻穴の入り口から最奥部まで、平滑筋

が執拗にマッサージされ、蕩けていく。頬の内側も歯茎も舌も、細かな分肢に撫で回されると快感を発し始めた。溢れる涎が淫水のよう。だらしなく開いた唇から垂れ落ち、仰け反った喉を濡らす。

（ああ、イク、またイッチャウウ……）

淫神の神技に朦朧とし、再び遥かな高みへ舞い上がろうとした、その瞬間、

「うふえあつ!? んあ、んあああ……っ!!」

無防備に膨らんでいた乳首とクリトリスが、強烈に吸い立てられた。三つの肉豆に弾ける激感。零を犯しているのとは別の象神が、鼻を三つに割り、呪い屋の肉突起に被せてきたのだ。

（ああやける、ちくびが、クリトリスがああ……ッ!?）

乳奥にあった熱い疼きが胸先に集まり、子宮で渦巻いていた溶岩が淫肉を伝って淫核の根元へ移動してきた。限界だと思っていた肉豆が、ムクムクと膨れ上がる感覚。張り詰める皮膚が感度を増し、鋭く吸い立てられて電流が走る。

「ふえあ、あうう……にや、にゃんれえ!」

己の胸先を見下ろした猫目が、驚きに見開かれた。たわわな乳房の先にあったのは、小指よりも太い肉棒。覆い被さった象神の鼻に隠れて根元しか見えないが、じゅじゅ、じゅじゅとしゃぶられるたび、恐ろしいまでに太くなっていく。

「くううう……ンはうう！」

ぬぼん！ と触手が離れ、三本の勃起肉突起がピンピンと痺れた。あまりの快美感に息が詰まり、頭の中が真っ白になる。

(な、なに……どうなって……ああっ!?)

乳房の先にそそり立っていたのは、サクランボやグミの実に喩えられる可愛らしい乳首ではない。粘液にまみれていやらしく光る、真っ赤に怒張したペニス。先の丸まった肉クサビの先端には縦割れした小さな唇のような鈴口があり、凛々しくエラを張った大振りな亀頭、青筋を立てて雄々しく屹立する肉棒——まさに剛棒と言うに相応しい逸物に、改めて細分化した触手が一齐に襲いかかってくる。

「んんえああああ——ッ！」

ペニス型肉突起がシュッシュッとしごかれた。瞬間、重い衝撃がズンッ！ と頭頂へ突き抜ける。三つある勃起のすべての肉芯が白熱化する。粘ついた肉紐で肉茎を擦り上げられるたび、ズキンズキンと狂おしく疼いた。胸先で、股間で、肉棒が猛々しく反り返る。

(ああ、さ、さがああ……!)

三本の疑似ペニスの先、赤々と輝く亀頭が硬直した。皮膚は痛みを覚えるくらいまで張り詰め、冷たい夜気に撫でられただけで微弱電流が生じる。先端がピクピクして、いまにもナニかが噴き出してきそう。

牝象神の鼻はさらに細かく分かれた。先に小さな吸盤を生やし、偽男根のカリ首や裏筋にぴちゅぴちゅとキスの雨を降らせる。

「ふえっ、あ、ああっ！ あひっ、うくうっ、ん、んんう——ッ！」

触るだけでいきそうなほど勃起していた乳首、クリトリス。何十倍にも巨大化したそれが、三本同時に弄りまくられる淫撃。吸いつかれた淫棒の肌に火花が弾け、三つの肥大化肉突起が限界まで膨れ上がる。ブワツと亀頭の傘が開き、鈴口から透明なぬめり汁がピュピュッと迸った。スマレの香りが一段と濃くなる。

匂いに誘われたように、髪の毛より細く割れた触手が先走り汁を垂らした鼻先に近づく。ヒクつく疑似尿孔に先端を突き入れ、グリグリと穿った。

「ひああッ!? ひゅごい！ ひゅごいよお、おう、きひいいいいッ!!」

肉棹から乳房へ恥丘へ、激感電流が突き刺さる。

脛の裏に稲光が走り、脳髓が灼ききられた。ふわっと眉根が開き、焦点を失った猫目がゆらゆら揺れる。触手に犯された口端からは涎と喘ぎが溢れ出し、膣と肛門は震え出すほど緊縮して、呑み込んだ肉紐をしゃぶるように揉み立てた。

（ああ、イイイ……イイのに、どうしてえ……!?）

イッたと思つたのに、勃起乳首や肥大化クリトリスの疼きは少しも弱まらなかった。そればかりかますます硬くなり、爆発しそうなほど熱くなる。

「うやらあ、あちゆい、あちゆいよお……お、オチンチンが、はじけちゃうう……！」  
細管に潜り込んだ触手が白濁液の奔流を堰き止め、絶頂をおあずけしているのだ。全身から汗が噴き出し、頭は朦朧としているのに、飛翔感が与えられない。弾けるような悦びはなく、ただ狂わんばかりの愉悦が身体の中に蓄積する。

「いひゃへへ……おねふあい、いひゃへへよお……」

身を焼き焦がす淫悦に涙がこぼれ、腰がくねくねと卑猥なダンスを踊ってしまう。触手に肥大化肉突起を啜えられた乳房が捻れ、柔肉の谷間が擦れ合って、汗の飛沫が飛んだ。

（あうう、だ、ダメ……うごいたら、ますます……）

捻れる身体に引つ張られ、汗と催淫粘液にぐつちよりと濡れた穴空きレオタードが繕れる。破れた黒布が尻肉に喰い込み、搾り上げた。胸の穴は火照った乳麓をキュウ、キュウと揉み込み、しごき抜く。全身から湧き上がる愉悦。胸先に、股間に、煮え滾った血流が流れ込み、疑似ペニスがますますいきり立った——と。

「んあッ!? ひぎうう! らめ、らめらめらめえええ——ッ!!」

胎内に、いきなり湧き上がる鋭い快美感。膣がぐちよぐちよと攪拌され、直腸が激しく揉み上げられる。

（な、なにコレ……コリコリしてる、なにコレ、なにいい!?)

繊細な粘膜に感じるのは、小指の先くらいの肉イボ。ペニス型触手の側面にピッシリと



生えて、ブブブブ、と電動玩具のように顫動する。喉を犯した肉紐も、小さな振動体を生やして性感帯と化した食道を責め立てた。

「うれああああああ……やうえ、やうええええ……っ！」

舌がしごかれ、唇が弾かれて声が震える。涎が止まらない。蠢く尻穴からは腸液が、ひくつく膣穴からは白く泡立った淫水が、振動するイボに掻き出されてドロドロと溢れ出してきた。身体の芯に直接刻み込まれる、甘美な激震。脳髄までが揺すり上げられ、ぐちゃぐちゃに掻き混ぜられる。さらに――。

「きひううう、もうらめ、おっぱいは、らめえええっ！」

快感に張りを増す乳房を慰めるように、何本もの触手が群がってきた。硬い亀頭を擦りつけ、艶めかしい朱に染め上げられた乳肌をウニュウニュと揉み立てる。手足に絡みついた触手は真つ赤な鎌首を持ち上げて、レオタードの破れ目からはみ出した太腿や肩、腕の柔肉を執拗に舐め回す。

（ああ、おかしくなるうう……痛い、オッパイのオチンチンがあ、クリトリスがあっ！）

内と外から滅茶苦茶に揉み回されて、膨れ上がる悦び。乳房の先や股間に生えた疑似男根が、鋼のように硬くなる。淫肉が膨れ、亀頭が弾けてしまいそう。流れ込む血流にズキンズキンと拍動痛を発し、触手にしごかれて余計に熱くなる。

「うお、おねらい、おねらい……らさせて、らさせてよおおっ！」

もうダメだ、もう限界だ。これ以上焦らされたら、本当に弾けてしまう——意地悪な触手を振り払おうと身をくねり、腰を引いた途端、

「くひいいい——ッ!？」

肥大化肉突起の中に電撃が弾けた。脇の裏に閃光が弾け、意識が飛ぶ。

「いいいイくううう……うえあ？　ま、まらなの、まらなの おおっ!？」

あと少しで絶頂だというのに、無理矢理引き戻されてしまった。イきたいのにイけない、凄まじいまでのもどかしさ。くびれたウエストがくねり、犯された尻が媚びるように踊る。イボつき淫棒を咥えた口は涎の滴をこぼしながらいやらしく蠢いた。舌と唇を懸命に遣い、たくましい肉棹に唾液を塗り込んでしゃぶり立てる。膣と肛門はキュウ、キュウ、と窄まって、狂おしく捻れた粘膜穴が太い淫棒を搾り上げた。

それでもまだ、イけない。

(こんなにしてるのに……おかしくなりそうなのがいい……くあ!?)

恨めしく思った零を叱りつけるように、身体に絡みついた触手がギリギリと締め上げてきた。柔肌に催淫粘液が塗り込まれ、熱い欲望がますます高まる。疑似尿道孔に潜り込んだ細い肉糸はビチビチと跳ね、爆発しそうに勃起した神経の塊を内側から責め立てた。

「んああああああああああっ!!」

凄まじいばかりの激感。意識ばかりか、身体まで壊れていく。

(だ、だめ……ゆるして、おねがい……ゆるしてえ……ッ！)

すべてを投げ出し、心の底から赦しを請うた瞬間、

「んひいいッ!? ふえあ、ふえああッ!!」

三つの肥大化肉突起に鋭い電流が突き刺さった。疑似尿道孔に潜り込んでいた触手が、くねりながら抜け出していくのだ。

ズズン!

同時に子宮が激しく突き上げられる。いや、子宮だけではない。三本の肉紐に生えたイボイボが一斉に細かく震え出し、直腸や食道を揉み上げて激感を刻む。

「けひああああ! しゅごい、しゅごい——ッ!」

乳房や太腿に巻きついた触手は蛇のようにくねり、柔肉を愛撫しまくった。ペニス状の乳首やクリトリスに巻きついた肉紐は強弱をつけて揉み込みつつ、粘液にぬめる腹を擦りつけてシュッシュッとしごき上げる。

「ンふえあああ……うりやああつ!? らめらめれるる、にゃんかれちやううう!」

双球内部に膨れ上がる熱の感覚。抜け出ていく肉糸を追って、疑似ペニスの細管に沸騰した液体が迫り上がってくる。

(ああ、ぬける、もうすぐ、せんが、ぬけるうう……!)

すびっ!

肥大化肉突起の先から、髪の毛より細くなった触手が完全に抜けた。代わりに突き刺さる快感。

「みやはあぁッ！　イクイク、イッリやうううううう——ッ!!」

今度こそ本当に、虚空へ弾き飛ばされた。光よりも早く、絶頂へ飛翔。

ビクビクッと仰け反って縦揺れする乳房の先、突き上げるように跳ね上がった股間の先で熱いモノが爆発し——。

ドピュッ！　ドピュピュ、ドピュドピュッ!!

細管を震わせ、三本の疑似男根から煮え滾った粘液が噴出する。夜闇に白い弧を描く、蕩けたアイスクリームのように濃密な液体。見せびらかすように突き出された股間では本物の尿道口がヒクつき、ぷしやあぁッ！　と勢いよく大量の潮を噴いた。

「うあぁあぁっ！　れるれる、れちやううううっ！」

穴という穴から体液が噴き出す。渦巻いていた焦燥感がウソのように消えていき、全身が弛緩して頭の中はもう真っ白。ようやく達した絶頂に朦朧とし、身体を満たす恍惚にふわふわと微笑む呪い屋——だが。

「ふえあぁあ……んあ!?　なんえ、ふおんら、ふおんらあ……ッ!？」

ビュクビュクと噴き出す粘水にはキリがなかった。ペニス型乳首から迸る液体は甘ったるいミルクの匂いを振り撒き、肥大化クリトリスからは濃密なスマイレ香を含んだ白濁液が



嘔き出し続ける。薄闇を侵蝕する乳と花の香り。服や髪にまで染み込んでくる。

「うにゃあ……ち、力が……あはあ、吸われて、るうう……」

淫悦に冒されて切れ切れの意識の中、生気が急速に失われていくのを感じた。大聖歡喜天に呪力を吸い取られているのだ。だがもう、悦び以外はなにも分からない。

(あ、あああ、イイ……きもち、イイ……)

猫目を淫らに細め、口端や膣穴から白く濁った粘液をこぼしつつ、零は意識を失った。

※

いつも目覚めは突然だ。

失神した零の代わりに、高機能呪詛ZERO、覚醒。しかし――。

(なんだ、コレは!?)

いつものように身体チェックをしようとした途端、異常な感覚に包まれて狼狽する。

(全身から、異常信号が……)

粘液に濡れた柔肌が、こらえがたい疼きを宿して燃えていた。乳房が重い。乳首が、クリトリスが、痛いほどに膨らんでドクンドクンと拍動している。子宮には溶岩が溜まり、膣は意識を無視していやらしく蠢いていた。直腸粘膜は狂おしく波打ち、深々と潜り込んだたくましい弾力を夢中で撫で回している。

「あ、ふ……」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**